

【論文】日本語聴解テストにおける学習者の解答過程

—回顧的口頭報告のプロトコル分析—

島田 めぐみ¹, 保坂 敏子¹, 澁川 晶²,
孫 媛³, ウォーカー 泉⁴, 谷部 弘子⁵

¹ 日本大学大学院総合社会情報研究科, ² 国際基督教大学,
³ 国立情報学研究所, ⁴ シンガポール国立大学, ⁵ 東京学芸大学

Exploring Learners' Answering Process in a Japanese Listening Comprehension Test —A Protocol Analysis of Retrospective Verbal Reports—

SHIMADA Megumi¹, HOSAKA Toshiko¹, SHIBUKAWA Aki²,
SUN Yuan³, WALKER Izumi⁴, YABE Hiroko⁵

¹ Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies
² International Christian University, ³ National Institute of Informatics,
⁴ National University of Singapore, ⁵ Tokyo Gakugei University

We conducted an experiment on 13 learners of Japanese to see how they answered the items of a CEFR B1 equivalent level Japanese listening comprehension test. In the experiment, a retrospective verbal report method was used. The results of five subjects in the higher group (CEFR B1 achievement level) and six subjects in the lower group (B1 non-achievement level) were compared for the 16 items on the test. The comparison revealed the following: 1) The higher group could grasp the flow of the entire text, while the lower group could understand only a part of the text. 2) On items seeking understanding the implications, the higher group was able to understand the implications even there were not directly expressed, while the lower group tended to understand it literally. 3) There was no difference between the higher and the lower groups on items that could be answered correctly with only a partial understanding. This study therefore helps clarify how learners at the CEFR B1 level understand spoken texts.

1. 研究の背景と目的

筆者らは、認知診断アセスメント (Cognitive Diagnostic Assessment, 以下, CDA とする) を目的とする日本語聴解認知診断テストを開発している (島田ほか, 2020)。CDA は、測定対象となっている領域・分野の学習や理解に必要なアトリビュート (attribute) を設定し、個々のアトリビュートの習得状況を推定することにより、各学習者の強み、

弱みをフィードバックすることができるアセスメントである。さらに、どのように学習を進めればいいのかという情報を提供し、学習の改善へと導くことを可能とする。

筆者らが開発する日本語聴解認知診断テストは、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment, 欧州言語共通参照枠) の B1¹ レベルを想定している。このテ

¹ CEFR の B1 は、インタラクションを継続すること、

また日常の問題を柔軟に対処することができ、日常的

ストでは、CEFRのA2レベルの学生がB1に到達するためにどのようなアトリビュートの習得を押し進める必要があるかというアドバイスを与えることを目指している。そのため、B1レベルの学習者と未到達の学習者とは、聴解能力においてどのような差異があるかを知る必要がある。そこで、本研究では、1) B1レベルの学習者とB1に到達していない学習者とは、日本語テキストの聞き方においてどのような違いがあるか、2) 聴解テストの項目の特徴は1)の結果にどのように影響するか、この2点を明らかにすることを目的に調査を行うこととした。これらのことが明らかになることにより、学習者へのアドバイスの方法に加え、どのような項目を作成したらいいかという指針が得られると考えた。

2. 先行研究

まず、日本語聴解テストの解答過程に注目した研究を概観する。もっとも初期のものに日本語教育学会・調査研究第1小委員会(1992)がある。日本語学習者が日本語能力試験の聴解問題10項目について、どのような段階でどのようなストラテジーを用いているかを明らかにするために発話思考法により調査、分析している。この研究では2種類の方法がとられている。1つは、設問とテキスト等を聞いた後にどのように解答したかを調査者が尋ねる方法であり、もう1つは、学習者2人がペアとなり、2人で機器を操作しながら音声聞き、相談しながら答えを選ぶ過程を記録するというものである。これらの試みにより、問題形式、選択枝の長さ、正答の作り方など作問に関わる貴重な情報が得られたと言う。その他、島田(2006)では、聴解テストの選択枝提示形式(文字形式か音声形式か)がどのように結果に影響を及ぼしているのかを明らかにするために、24項目について9名の学習者を対象に発話思考法の調査を実施し分析を行っている。その結果、選択枝提示形式によって、解答過程が異なることを明らかにしている。板橋(2020)では、日本語能力試験聴解問題のうち即時応答能力を問う問題形式2項目について、45名から回想法によりデータを収集し分析している。

その結果、中上級以上の学習者がどのような場合に正答が選ばないかということ、また、機能の推測やムードを頼りに選択枝を選んでいることを明らかにしている。島田ほか(2020)では、回顧的口頭報告(Retrospective Verbal Report)の調査結果に基づき、日本語聴解認知診断テストの改善を行っている。改善の結果、認知診断モデルの数値が改善され、この方法が有効であることを明らかにしている。これらは、量的な項目分析では明らかにならない解答過程を、口頭報告の分析により明らかにした研究である。

次に、B1レベルの日本語学習者が日本語テキストをどのように理解するのかを考察した東(2013)を取り上げる。この研究ではB1相当レベルの学習者がどのように聴解スキルを用いてテキストを聞いているかを考察している。東(2013)は、回想インタビューを用いて、CEFR B1前後の学習者12名がストーリー性のあるテキストに対し、どのような聞き方をし、どのように理解しているのかを考察している。約2分の音声教材を1回聞かせ、何がわかったかを自由に母語で話してもらい、分析を行っている。その結果、理解したことをどのように報告したかにより、4つのタイプ、すなわち、1)ストーリーの主要な点がわかった、2)抜けている点、違う点はあるがだいたいわかった、3)部分的にはわかったが全体的な理解ではない、4)部分的な理解にも限度がある、に分けている。そして、1から4の学習者がどのようなストラテジーを用いているかを明らかにした上で、聴解に成功した学習者は、モニタリングを頻繁に行っている、わからない語彙のためにテキストから離脱しないということを明らかにし、B1に求められる聴解スキルは話の流れの要点を掴むことではないかと述べている。

以上の研究は、いずれも学習者の口頭報告の内容を分析した研究であるが、口頭報告を得る方法には複数の手段がある。その一つが「特定のタスクに関わっている際に、心にあるものを外に出す」(セリガー・ショハミー, 2001, p.186)発話思考法(Thinking aloud)である。読解の場合は読みながら考えていることを報告することが可能であるが、聴解の場合は

に当該言語を使用できるレベルである(North, 2015,

p. 49)。

なぜその答えを選んだか、わからなくて困った語や表現があったかなどを報告するよう求めた。協力者の求めがあれば、音声の再生を行うこともあった。

2019年9月に、米国（ハワイ州）のA大学の6名とシンガポールのB大学の7名、合計13名を対象に実験を実施した⁴。実験での発話内容は協力者から許諾を得た上で、録音した。実験は、協力者1名に対し調査者1名ないし2名が行った。協力者1名あたりの所要時間は50分程度であった。

項目は29項目であったが、50分の間に全ての項目を取り上げるのは不可能であるため、まず、29項目のうち28項目をA版（10項目）、B版（9項目）、C版（9項目）に分配し、残る1項目をB版とC版双方に加えた。その結果、A版（10項目）、B版（10項目）、C版（10項目）というテストセットが構成された。この3種類のテストセットを順番に用いて実施した。A版とB版を用いた協力者は各4名、C版を用いた協力者は5名であった。また、それぞれの版の調査終了後時間が余った場合は、50分以内で他の項目にも解答および報告を依頼した。そのため、各協力者の解答項目数に差が生じた。

4.結果

4.1 協力者のレベル設定

全29項目の回顧的口頭報告の結果、不適切な項目が8項目あり、それらを削除した⁵。残る21項目のうち各協力者が解答した項目数は6から10項目であった（表1参照）。分析対象となった報告は、13名分合わせて合計102である。

21項目の結果を用いてレベル群分けを行った。各協力者の解答数と正答数から正答割合を計算し、0.7以上を上位（5名）、0.5以上0.7未満を中位（2名）、0.5未満を下位（6名）とした。各協力者の正答割合は表1の通りである。しかし、それぞれ異なる項目に解答していることから、正答割合を単純に比較することはできない。そこで、日本語能力試験（JLPT）の結果と、調査者がこのテストの受験者層（CEFR B1

レベル）を基準としての印象（上、中など）を記録している場合は、それを表1の日本語能力参考資料の列に記載した。この結果を見ると、正答割合から判断したレベルは妥当だと考えられる。上位群の協力者は、B1を想定して開発したテストで7割以上正答しているため、B1到達レベルと判断した。そして、正答数が半数未満の下位群をB1未到達レベルと判断した。各項目について、両者の間を中心に解答過程に違いがあるかを検討する。

表1 協力者の概要

協力者	母語	解答数	正答数	正答割合	群	日本語能力参考資料
H1	E	6	5	0.833	上	高校で日本留学、JLPT N4 合格、上
H2	K	8	1	0.125	下	JLPT N3 合格、中下
H3	K	8	2	0.250	下	JLPT N3 合格、中下
H4	E	6	2	0.333	下	あまり話せない、下
H5	E	9	2	0.222	下	高校で日本留学、中
H6	E	7	1	0.143	下	あまり話せない、下
S1	C	6	6	1.000	上	JLPT N1 合格、上
S2	C	9	7	0.778	上	JLPT N2 合格、上
S3	E	8	5	0.625	上	JLPT 受験経験はない、上
S4	E	9	7	0.778	上	JLPT N1 に不合格、上
S5	C	9	5	0.556	中	JLPT 受験経験はない、中上
S6	I	10	5	0.500	中	JLPT 受験経験なし、中
S7	E	7	2	0.286	下	JLPT 受験経験なし、中下

*協力者のH1からH6が米国の協力者、S1からS7がシンガポールの協力者である。

*母語のEは英語、Kは韓国語、Cは中国語、Iはインドネシア語を指す。

⁴ 実験に先立ち、日本大学総合社会情報研究科の倫理審査委員会の審査を受け承認された（受付番号：HP19S001、承認日：2019年4月30日）。

⁵ 難しすぎる項目、正答が得られない項目などが削除対象となった。

4.2 解答過程の分析

4.2.1 データの概要

「主旨理解」「特定情報理解」「詳細理解」「含意理解」のアトリビュートごとに解答過程について分析を進める。21項目のうち、項目14はこれらのアトリビュートが関わっていないため分析の対象から外す。また、項目2, 8, 9, 29は、上記アトリビュートのうち2つのアトリビュートが設定されているため、今回の分析では、これらを分析対象から外し、上記アトリビュートのうち単一のアトリビュートを想定して作成した16項目を分析する。

16項目の版(A, B, C), アトリビュート, 回顧的口頭報告の報告数は表2の通りである。先述の通り、追加項目への解答を求めた場合があったため、データ数に偏りが生じた。また、各項目の報告は、上位群と下位群の学習者が同様に含まれることが望ましいが、調査終了後に協力者のパフォーマンスによりレベル(上位群, 中位群, 下位群)を決定したため、事前にレベル設定を調整できなかった。そのため、結果として上位群の報告がない項目もあった。

表2 各項目の版, アトリビュート, 報告数

項目	版	アトリビュート	報告数 (上位/中位/下位)
1	B, C	主旨	5 (1, 1, 3)
3	B	特定	4 (2, 0, 2)
4	C	詳細	5 (0, 2, 3)
6	A	主旨	4 (3, 0, 1)
7	B	主旨	4 (3, 0, 1)
10	B	主旨	5 (3, 0, 2)
13	B	詳細	5 (2, 0, 3)
15	A	主旨	6 (3, 2, 1)
19	B	含意	4 (2, 0, 2)
20	C	詳細	5 (0, 2, 3)
23	C	詳細	5 (0, 2, 3)
24	A	特定	4 (3, 0, 1)
25	B	含意	4 (2, 0, 2)
26	C	含意	5 (0, 2, 3)
27	A	特定	4 (3, 0, 1)
28	B	特定	5 (2, 1, 2)

4.2.2 データのコーディング

各協力者の各項目に対する発話を解答過程の観点から分析したところ、表3のコードにまとめることができた。①全体理解, ②部分理解, ③一部理解, ⑥不理解は理解の程度を示している。東(2013)でも、先述の通り、理解のしかたにより4段階に分類しているが、ほぼ同様の分類となっている。本研究では、さらに、④含意理解, ⑤字義通りの理解という理解の質に関わるコードが認められた。また、⑦推測という聴解ストラテジーと⑧語マッチングというテストストラテジーに関わるコードも観察された。以下の分析では、各協力者の発話について①から⑧までのコードの内容が観察されるか分析し、表4のようなマトリックスを作成した。表4中の「1」は発話の中に該当コードが観察され、それが正答へ結びついたという意味であり、「(1)」は発話の中に該当コードが観察されたが、誤答であったことを示す。「-」は、該当コードが観察されなかったことを意味する。

表3 解答過程に関するコードの一覧

概念	コードと定義
理解の 程度・ 質	①全体理解 : 全体の流れやキーコンセプトの理解
	②部分理解 : 複数の箇所を理解
	③一部理解 : 一文や一語のみの理解
	④含意理解 : 発話者の含意の理解
	⑤字義通りの理解 : 字義通りの理解
	⑥不理解 : 理解不能, 聞き間違い
ストラ テ ジ	⑦推測 : 未知の語や表現についての推測
	⑧語マッチング : 聞き取った語と選択枝とのマッチング

表4 マトリックス例 (項目7)

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S2	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S3	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S4	上	1	-	-	-	-	-	-	-
H5	下	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)

4.2.3 発話データの分析

4.2.3.1 主旨理解

「主旨理解」に該当する項目は、項目 1, 6, 7, 10, 15 の 5 項目である。項目 1, 7 の 2 項目では、上位群は全体を把握できていたが、下位群は一部の聞き取りにとどまっていた。例として項目 7 (図 1) をあげる。項目 7 の報告数は 4 件 (上位群 3, 下位群 1) であり、上位群は正答が得られ、下位群の報告者は誤答選択枝を選んだ。表 4 は、項目 7 に対する協力者の発話を分析したマトリックスである。上位群の 3 名は全員、全体を理解し正答を得ており、下位群の 1 名は、一部を理解し、聞き取った語が含まれた誤答選択枝を選んだことがわかる。

具体的な報告内容を見ていく。上位群の S2 は「アニメが好きで、アニメの作り方が知りたい。それで会社に入った。」というように全体の流れを把握し、正答「会社に入った理由」を選択した。別の上位群 S3 は「最初にアニメを見るのが好きだから、仕事に…」というようにキーコンセプトを理解し、正答を選んでいる。一方、下位群の H5 は、「作り方の話をした。」と、スクリプトの一部を聞き取り、選択枝の中から「作り方」が含まれる選択枝「アニメの作り方」を選んでいる。

項目 1 の報告数は 5 件 (上位群 1, 中位群 1, 下位群 3) であり、下位群 2 名は誤答選択枝を選び、それ以外の協力者は正答が得られた。ラジオでの対談という設定であり、テキストでは、動物園では赤ちゃんの誕生が続いているが、今後動物が見られなくなるかもしれないという深刻な状況にあり、この後深刻な状況についての話がなされるということが示唆されている。表 5 にある通り、項目 7 同様に、上位群は、全体を把握した上で要点を正しく理解していた。上位群の S4 は、「キリンとパンダの誕生言いました。その後は問題について話したい。「厳しい状態」について詳しく話す。」と発話全体の流れを理解している。下位群の中では唯一 H3 がテキストの全体像を理解し正答を得ている。H3 以外の下位群の協力者は、「赤ちゃんが生まれた」という談話の一部を聞き取り、その文言が含まれる誤答選択枝「動物園での赤ちゃん誕生の状況」を選んでいた。

項目 1 と 7 から、上位群は話の流れを把握し、焦

点となる点を正確に理解できるが、下位群の多くは聞き取れた一部の箇所を理解するにとどまるため、主旨が理解できていなかったことがわかる。項目 6 も同様の傾向であった (表 6)。

表 5 項目 1 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S4	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S6	中	1	-	-	-	-	-	-	-
H2	下	-	-	(1)	-	-	-	-	-
H3	下	1	-	-	-	-	-	-	-
H5	下	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)

表 6 項目 6 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
H1	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S1	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S2	上	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)
H4	下	-	-	-	-	-	(1)	-	-

しかし、上位群と下位群の間で差が見られない項目もあった。項目 10 (表 7) は、報告 5 件 (上位群 3, 下位群 2) のうち、下位群の 1 名を除く 4 名が正答を選んでいた。この項目は、ラジオで女性が話しているのを聞いて、女性が言いたいことがどのようなことかを聞き取る項目である。上位群の S2 は、「この人は今仕事を探しているが、どんな仕事が好きか、どんな仕事が合っているか、わからないという問題がある。自分がやりたい仕事が見つからないから、1 を選んだ。」と発話全体について説明している。下位群で正答を得た H5 は「最後の方は、この女の人がどんな仕事合うかわからないと言いました。」と述べており、部分理解で正答 (自分にあう仕事が見つからない) を得ている。この項目は、テキスト中で、「わかってなくて」「どういうのが向いているのかもわからない」など、正答内の表現と共通する「わからない」が繰り返されている。しかも、理解しやすい語であるため、下位群にとっても比較的正答が得やすいと考えられる。

表7 項目10のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S2	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S3	上	-	1	-	-	-	-	-	-
S4	上	1	-	-	-	-	-	-	-
H2	下	-	-	(1)	-	-	-	-	-
H5	下	-	1	-	-	-	-	-	-

項目15も項目10のようにレベルにかかわらず正答が得られていた。項目15の報告数は6件(上位群3, 中位群2, 下位群1)であったが, 上位群S2を除き正答が得られている(表8)。この項目は、「6時以降建物から出るとドアが開けられなくなるので, その場合は教員に言うように」という指示の内容を聞く項目であり, 正答は、「6時の後外に出るときは教員に言う」である。下位群のH4は「6時, 聞きましたから。」と一部の理解から「6時」が含まれる正答を選んでいる。上位群のS2が「わからなかった。速いから。」と述べているように, この項目は比較的話速が速く, 細かい点を聞き取ることが難しかったようである。しかし, 一部あるいは部分的な理解で正答が得られていることがわかる。主旨理解のアトリビュートを測定する目的で作られた項目の中にも, 項目10, 15のように一部の理解で正答が得られ, 上位群と下位群を識別することが難しい項目があった。

表8 項目15のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
H1	上	-	1	-	-	-	-	-	-
S1	上	-	1	-	-	-	-	-	-
S2	上	-	-	-	-	-	(1)	-	-
S5	中	-	-	1	-	-	-	-	-
S6	中	-	1	-	-	-	-	-	-
H4	下	-	-	1	-	-	-	-	1

4.2.3.2 特定情報理解

「特定情報理解」の該当項目は, 項目3, 24, 27, 28の4項目である。項目24と27は, 上位群も下位群も同様に正答が得られた項目である。項目27(図2, 表9)は, 留守番電話を聞いて「明日, インター

ホンでまず何番を押すか」ということを聞き取るものである。報告数は4件(上位群3, 下位群1)である。上位群のH1は「最初は303。あ, 明日は304と言った。もし304に誰もいなかったら310。」と詳細に説明している。下位群のH4も「いつもは303, 今日ではチェンジで304。」と全体の流れを理解している。

【問題冊子】

設問：男の人からの留守番電話を聞いています。あした, 男の人の会社のビルについたら, インターホンでまず何番を押しますか。

選択枝：303 304 310

【音声スクリプト】もしもし, 神田です。お世話になります。あしたのことですが, こちらのビルにお越しのございましたら, ビルの入口にインターホンがありますので, そこから, 私を呼んでほしいんですが, わたくしは303という部屋におりますので, 303を押してください。あ, すみません。すみません。あしたは, わたくし, 304にいました。304を呼んでください。で, もしかしたら, 会議が長引いて, 会議室にいる可能性もありますので, 304で出ない場合は, 310を呼んでください。では, お待ちしています。よろしくお願いたします。

図2 項目例(項目27)

表9 項目27のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
H1	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S1	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S2	上	1	-	-	-	-	-	-	-
H4	下	1	-	-	-	-	-	-	-

項目24は, 電気店の入口で店員が商品の案内をしており, プリンター, キーボード, モニターの価格が伝えられる中からプリンターの価格を聞き取るというものである。報告数は4件(上位群3, 下位群1)であるが, 全員正しくプリンターの価格を聞き取ること成功している(表10)。この項目は複数の情報からある一部の情報を聞き取る項目として作題しており, 下位群では作題者の意図通りに「プリンター」部分のみの聞き取りで正答を得ている。しかし, 上位群はプリンターの金額だけではなく, 発話全体を報告する者が多かった。

表 10 項目 24 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
H1	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S1	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S2	上	-	-	1	-	-	-	-	-
H4	下	-	1	-	-	-	-	-	-

上位群と下位群で差が見られる項目もあった。項目 3 の報告数は 4 件（上位群 2, 下位群 2）であった（表 11）。天気予報を聞いてこれから天気がどうなるかを問う項目である。音声スクリプト「まだ雨雲というわけではないんですが、この後だんだん雨雲が変わってきます」から「天気が悪くなる」が正答となる。報告を見ると、全協力者にとって「雨雲」が未知語であることがわかったが、上位群 S4 は「まだ雲見えていないけど、後は雨雲？だから天気はいいけど、後は悪くなる。「雨雲」はわからないけど、dark clouds.」、S3 は「「雨雲」悪い意味だと思って guess した。」と述べ、2 名とも「雨雲」を正しく推測していることがわかる。下位群の 2 名は、雨雲の意味推測には失敗しているが、聴解スクリプト中の「だんだん」から「天気に変化すること」を推測している。しかし、これだけでは、天気が好転するのか悪くなるのかがわからないため正答にたどり着けなかった。

表 11 項目 3 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S3	上	-	1	-	-	-	-	1	-
S4	上	1	-	-	-	-	-	1	-
H2	下	-	-	(1)	-	-	-	(1)	-
H5	下	-	-	(1)	-	-	-	(1)	-

最後に、上位群も下位群も正答が得られなかった項目を見る。項目 28 は車内アナウンスを聞き、この電車の行き先がどこであるかを聞き取るものであるが、全員が誤答選択枝を選んでいる（表 12）。冒頭の「この電車は各駅停車の渋谷行きです」から正答は得られるが、上位群もこの部分の聞き取りに失敗している。「渋谷ゆき」を「渋谷えき」と聞いたり、「今渋谷に止まっている」と考えた者がいた。この要因

として、やや不明瞭で、話速が速い、という特徴のほか、国外で学ぶ学習者にとって車内アナウンスは理解しにくかったということが考えられる。

表 12 項目 28 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S3	上	-	-	-	-	-	(1)	-	(1)
S4	上	-	-	-	-	-	(1)	-	(1)
S6	中	-	-	-	-	-	(1)	-	-
H2	下	-	-	-	-	-	(1)	-	(1)
H5	下	-	-	-	-	-	(1)	-	(1)

4.2.3.3 詳細理解

「詳細理解」の該当項目は、項目 4, 13, 20, 23 の 4 項目である。項目 13 と項目 23 は、情報の関連を正しく理解する必要がある。項目 13 は、5 件の報告（上位群 3, 下位群 2）が得られた（図 3, 表 13）。下位群の学習者は 2 名とも、知っている語（薬）を聞き取り、誤答選択枝「薬」を選んでいる。例えば、H5 は、「薬を買おうと言いました。薬の話です。」と述べている。それに対して、上位群の S2 は、「新聞を読む時便利。だから薬ではない。薬の説明書を読む時、文字が小さいから使う。」と、新聞、薬、メガネの関係を把握している。

【問題冊子】

設問：友だちがフリッツについて話しているのを聞いています。フリッツとはなんのことですか。

選択枝：メガネ 辞書 薬

【音声スクリプト】

女 1：そういえば、私もフリッツを買いましたよ。

女 2：そう。どう？

女 1：いやあ、便利ですね。もっと早く買えばよかった。

女 2：でしょ。新聞読む時は、もうフリッツなかったら無理。

女 1：私は、薬のパッケージ。注意書きが小さいから。

図 3 項目例（項目 13）

表 13 項目 13 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S2	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S3	上	1	-	-	-	-	-	-	-
S4	上	1	-	-	-	-	-	-	-
H2	下	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)
H5	下	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)

項目 23 (表 14) は 5 件の報告 (中位群 2, 下位群 3) を得たが, 上位群の報告はなかった。項目 13 同様, 下位群の協力者は, 聞こえてきた語 (ズボン) から選択枝「ズボン」を選んでいるが, 中位群の S5 は, 「スポットを使うと stain が落ちると言った。「つけておく」と言ったが, 洗濯機なら「つける」とは言わない。」と推測ステラテジーを使用し, 正答である「洗剤」を選んでいる。

表 14 項目 23 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S5	中	-	1	-	-	-	-	1	-
S6	中	1	-	-	-	-	-	-	-
S7	下	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)
H3	下	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)
H6	下	-	-	-	-	-	(1)	-	-

このように, 項目 13 と項目 23 では, 下位群は, 語を個別に理解しようとするのみで, 語あるいは情報の間を関連づけることができないことがわかった。

一方, 項目 4 と項目 20 は, 下位群の協力者が部分あるいは一部の情報の理解で正答した項目である。項目 20 (表 15) の報告数は 5 件 (中位群 2, 下位群 3) であり, 上位群の協力者の報告はない。ラジオで男性がイベントを紹介しているのを聞いて, どのようなイベントだと言っているかを聞く項目である。正答「大人も子どもも楽しめる, 木でモノを作るイベント」を選んだ下位群の H6 は「男の人は楽しい, 楽しい, 楽しいと言った。子供も楽しんで。」と「楽しい」という比較的的理解しやすいキーワードを聞き取り, 「楽しめる」が含まれる選択枝を選択している。

表 15 項目 20 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S5	中	-	1	-	-	-	-	-	-
S6	中	-	(1)	-	-	-	-	-	-
S7	下	-	(1)	-	-	-	-	-	-
H3	下	-	-	(1)	-	-	-	-	-
H6	下	-	-	1	-	-	-	-	1

項目 20 同様, 項目 4 でも, 下位群が正答している (表 16)。報告者数は 5 件 (中位群 2, 下位群 3) であり, 上位群の報告はなかった。項目 4 は, 2 人がサッカーの試合の話をしているのを聞いて, 日本チームの結果を聞き取るという項目である。下位群の H3 は, 「最初, 勝ったと男が言った。差が少して, やばかったと思ってます。やばかったと言っていないが, 話の雰囲気悔しい。」から正答「少しの差で勝った」を選んでいる。誤答選択枝「少しの差で負けた」を選んだ中位群 S5 は「最後に負けたと言った。会話の途中は, 男の人は, 試合について不満を感じています。」と述べている。聴解スクリプトでは相手のチームについて「あんな負け方じゃな」と評しているが, S5 はこれを相手のチームではなく日本が負けたと誤解したために正答が得られていない。上記の通り, 下位群の 1 名が部分的な聞き取りで正答を得ており, 詳細理解の項目として不適切であった可能性がある。

表 16 項目 4 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S5	中	-	(1)	-	-	-	-	-	-
S6	中	1	-	-	-	-	-	-	-
S7	下	-	-	(1)	-	-	(1)	-	-
H3	下	-	1	-	-	-	-	-	-
H6	下	-	-	-	-	-	(1)	-	-

4.2.3.4 含意理解

含意理解の該当項目は, 項目 19, 25, 26 である。項目 25 は, 4 件の報告 (上位群 2, 下位群 2) が得られ, 上位群の学習者は正答を選択している (図 4, 表 17)。上位群の S3 は「明日はバイトが早いと言っていたから, 早く寝たいと思う。」と, 正しく男性の含

意を理解していた。下位群の H2 は、「明日バイトが早いから」から誤答選択枝「早くアルバイトに行きたい」を選び、H5 は「ゆっくりしてね」から誤答選択枝「女の人とゆっくり話したい」を選んでいる。いずれも聞いて理解した表現が含まれている選択枝を選ぶのみで、正しく発話意図を理解していない。また下位群 H5 は「早く帰りたいと言いませんでした。」と述べ、正答である「早く帰りたい」を否定している。このように下位群は字義通りに理解するのみで含意を理解できないが、上位群は、直接表現されていないことも理解できることがわかる。

【問題冊子】	
設問：	パーティーで友達が話しているのを聞いています。この男の人はどうしたいですか。
選択枝：	もっと料理を食べたい。 女の人とゆっくり話したい。 早くアルバイトに行きたい。 早く帰りたい。
【音声スクリプト】	
女：	デザート、あるよ。とりに行く？
男：	あ、甘いもの、苦手なんだ。
女：	じゃ、飲み物は？
男：	結構飲んだし、大丈夫。
女：	そうなの？ まだこんな時間だよ。
男：	気にしないで、ゆっくりして。
女：	そう？
男：	明日バイト、早いんだよね。

図 4 項目例 (項目 25)

表 17 項目 25 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S3	上	1	-	-	1	-	-	-	-
S4	上	1	-	-	1	-	-	-	-
H2	下	-	-	(1)	-	-	-	-	(1)
H5	下	-	-	-	-	(1)	-	-	(1)

項目 26 は、5 件の報告 (中位群 2, 下位群 3) が得られた (表 18) が、上位群による報告はなかった。この項目は、エアコンについての学生による「私は…、先生、暑いようでしたら、どうぞつけてください」の発言から、学生の含意を理解する必要があり、正答は「暑くないのでエアコンをつけなくていい」である。中位群の学習者は正答を選択しているが、

下位群の学習者は全員、誤答選択枝を選んでいる。中位群は、「学生が暑いと思っていないこと」「先生のためにつけてもいいと考えていること」を正しく理解している。一方、下位群の報告では、H6 は、「女の学生も暑いと思っている」と誤解している。H3 は、「女の学生は暑いとも寒いとも言っていない。」と字義通りのみの理解にとどまり、「暑いとは思っていないこと」を理解できていない。このように、下位群は述べられたことをそのまま理解するが、中位群の 2 名は真意を理解することに成功している。

表 18 項目 26 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S5	中	1	-	-	1	-	-	-	-
S6	中	1	-	-	1	-	-	-	-
S7	下	-	-	(1)	-	(1)	-	-	-
H3	下	-	-	-	-	(1)	-	-	-
H6	下	-	-	-	-	-	(1)	-	-

表 19 項目 19 のマトリックス

協力者	群	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
S3	上	-	-	(1)	-	-	(1)	-	-
S4	上	1	-	-	-	-	-	-	-
H2	下	-	-	1	-	-	-	-	1
H5	下	-	-	1	-	-	-	-	1

項目 19 は、4 件の報告 (上位群 2, 下位群 2) が得られた (表 19)。女性が話している独話を聞いて、昨日どんなことがあったかを聞く項目である。上位群の 1 名のみが誤答している。下位群の H5 は「メールがわからない話をしていて。この人がメールの人の意味がわからなくて、なんでこんなこと書いてるかと言った。」と述べ、正答である「突然来たメールの意味がわからなくて困った」を選んでいる。上位群の S3 は、「彼女は E メール用の件がわからなかったが、どうやって紹介したらいいかわからないと言っていた。」と述べ、誤答選択枝「働く女性を紹介してほしいと言われて困った」を選んでいる。下位群が聞き取ったキーワード「メール」「わからない」が正答の文言に含まれているため、結果的に正答を

得られた可能性がある。一方、上位群の学生は、他の部分を聞き取ろうとして失敗している。

項目 25 と 26 は、下位群は発話を字義通りに理解するため含意を理解できなかったが、上位群は含意を理解し正答を得ていた。一方、項目 19 は、下位群が一部の聞き取りで正答を得ていた。

5. 考察

本研究の 1 つめの目的は、「B1 レベルの学習者と B1 に到達していない学習者とでは、日本語テキストの聞き方においてどのような違いがあるか」について考察することであった。表 20 は、正答した場合の全報告に現れたコードをレベル群ごとにまとめたものである。上位群を見ると、①（全体理解）のコードが 20 と多い。また、下位群との比較で考えると、②（部分理解）、④（含意理解）、⑦（推測）が多いことがわかる。下位群では、③（一部理解）と⑧（語マッチング）が多い。このように、上位群と下位群では正答を得る過程が異なることがわかる。

表 20 レベル群とコードのマトリックス（正答）

群	人数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
上位	5	20	4	1	2	0	0	2	0
中位	2	5	3	1	2	0	0	1	0
下位	6	1	2	5	0	0	0	0	4

表 20 は正答を得た場合の報告のみを取り上げたが、表 21 は、全報告に現れたコードを群ごとにまとめたものである。上位群は、①（全体理解）が多いが、下位群は、③（一部理解）、⑧（語マッチング）が際立って多いことがわかる。そのほか件数は少ないものの、上位群の④（含意理解）、下位群の⑤（字義通りの理解）も特徴的だと言える。

表 21 レベル群とコードのマトリックス（全報告）

群	人数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
上位	5	20	4	3	2	0	4	2	3
中位	2	5	4	1	2	0	1	1	1
下位	6	1	3	19	0	3	7	2	14

まとめると、上位群は、全体の流れを理解し解答することができるが、下位群は部分的に理解し、聞き取った語や表現から選択枝を選んでいる。そして、たまたまキーワードが聞き取りやすい語であると、下位群でも正答を得ることができていた。

「含意理解」のアトリビュートに関わる項目においては、上位群は直接表現されていない場合でも含意を理解できていたが、下位群は字義通りに理解する機会が多かった。金庭 (2011) では、語彙テストと聴解テストの結果を比較し、語彙をよく知っているのに聴解テストができない学習者が少なからず存在していることが報告されている。今回の実験では、語や表現の字義通りの意味を理解しても、含意を理解できないと正答を得られない場合があることを明らかにしたが、このことは金庭 (2011) の「語彙を知っているのに聴解テストができないこと」に対する答えのひとつとなるかもしれない。

2 つめの目的は「聴解テストの項目の特徴が 1) の結果にどのように関わるか」であった。聴解の目的に関わるアトリビュートごとに、上位群と下位群の報告を比較したところ、上位群の聴解過程には特徴が見られた。「主旨理解」のアトリビュートを問う項目では、上位群の報告には「全体理解」のコードが多く出現しており、下位群には見られなかった。東 (2013) は、B1 に求められる聴解スキルは話の流れの要点を掴むことではないかと述べているが、これは本研究の「主旨理解」に相当し、このことから B1 レベルにとって「全体理解」は重要な要素だと言えるだろう。次に、「詳細理解」を問う項目では、「主旨理解」を問う項目同様、上位群の報告の内容から「全体理解」のコードが多く観察された。さらに一部の項目では、上位群の学習者が複数の情報を関連づけて正答を得ていることが明らかになった。そして、「含意理解」を問う項目では、上位群の報告のみに「含意理解」のコードが観察されており、B1 には「含意理解」の能力が重要であることが確認できた。最後に、「特定情報理解」を問う項目は、一部の項目を除き、一部あるいは部分的な理解のみで正答できる項目が多く、それらは上位群と下位群による違いが見られなかった。B1 のテストに「特定情報理解」のアトリビュートが必要かどうか今後検討する必要がある。

あると言える。以上の結果からアトリビュートごとに、上位群の特徴をまとめた(表 22)。また、表 22 には、テスト作成の観点から、上位群 (B1 到達レベル) と下位群 (B1 未到達レベル) を識別することを難しくする要因を記載した。「特定情報理解」以外では、キーワードが聞き取りやすく、単純に選択枝と結びつけることができる場合は下位群も正答を得やすく、能力の識別には貢献しないことが明らかになった。

表 22 上位群の特徴と能力の識別を阻害する要素

アトリビュート	上位群の特徴	能力の識別を阻害する要素
主旨理解	全体を理解する	一部の聞き取りで解答できる、聞き取りやすい語が正答に含まれる
特定情報理解	—	一部の情報を聞き取るのみで正答できる
詳細理解	全体を理解する 情報を関連させる	一部の聞き取りで解答できる、聞き取りやすい語が正答に含まれる
含意理解	含意を理解する	一部の聞き取りで解答できる、聞き取りやすい語が正答に含まれる

今回の実験により、CEFR B1 レベルの学習者がどのように聴解テストのテキストを聞き取るのかを明らかにすることができた。これは今後のテストの項目作成や指導に役立つ結果だと言える。しかしながら、上位群の学習者の報告がない項目があったこと、結果には項目それぞれの特徴が影響すること、本研究で取り上げていない項目については別途調査が必要であることなどの課題もあり、さらなる項目での検証も求められる。これらは今後の課題としたい。

引用文献

板橋貴子 (2020) 「日本語能力試験聴解「即時応答」における解答プロセス」『国際交流基金日本語教育紀要』16, 17-28

金庭久美子 (2011) 「日本語教育における聴解指導に関する研究—ニュース聴解の指導のための言語知識と認知能力」『日本アジア研究』8, 1-29

島田めぐみ (2006) 「日本語聴解テストにおいて選択肢提示形式が解答過程に与える影響—発話思考法を用いて—」『日本言語テスト学会研究紀要』9, 101-116

島田めぐみ・澁川晶・孫媛・保坂敏子・谷部弘子 (2020) 「日本語聴解認知診断テストの開発を目指したアトリビュートとテストの分析」『日本言語テスト学会誌』23, 37-56

セリガー, H・ショハミー, E (2001) 『外国語教育リサーチマニュアル』(土屋武久・森田彰・星美季・狩野紀子訳) 大修館書店

日本語教育学会・調査研究第1小委員会 (1992) 『日本語聴解問題の改善に関する考察—最終報告書—』

東伴子 (2013) 「B1 学習者はどうやって聴くのか—ストーリーが分かるには—」CEFR B1 プロジェクト・チーム『CEFR B1 言語活動・能力を考えるプロジェクト 2012 年度活動報告書』67-77

横山紀子 (2004) 「第2言語における聴解ストラテジー研究—外観と今後の展望—」『第二言語習得・教育の研究最前線—2004 年版—』185-201

Council of Europe (2004) 『外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』(吉島茂・大橋理枝訳・編) 朝日出版社

North, B. (2014) *The CEFR in Practice*. Cambridge University Press.

謝辞

本研究は、JSPS 科学研究費補助金 20H01275 (研究課題名: 学習支援のための Web 版日本語聴解認知診断テストの開発) の助成を受けて行われたものです。

実験に協力いただいた協力者の方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

(Received: June 18, 2021)

(Issued in internet Edition: July 1, 2021)